2. つくばアートフィールド - 2

土と人の手で生み出せるもの

Artist
村井 隆宏　MURAI Takahiro
博士前期課程芸術専攻
クラフト領域 2 年

×

Writer
千葉 加奈子　CHIBA Kanako
芸術専門学群芸術学専攻
美術史コース 3 年

大きな岩、小さな石、さらさらとした砂、湿った泥。赤や黒、淡い黄色やくすんだこげ茶色。土そのものの感覚や温度を目に見える形で表現する。一見すると、村井さんの作品はこれが陶芸の作品かと衝撃を受けてしまうが、心地よい力強さが印象に残る魅力がある。

その不思議な作品がいかにして生まれてくるのか迫るべく、大学院で陶芸を学ぶ村井さんにお話を伺った。村井さんは筑波大学学群生の頃から陶芸作品を作り続けている。

「土」のカタチ

村井さんが普段の制作を行っている筑波大学工房棟焼成室には天井近い大きさのものから小さいものまで大きさが異なる電気窯がいくつかある。この部屋で陶芸の表現を探究する学群生と大学院生はそれぞれ自主制作に取り組んでいる。それらの机の上には様々なものが置かれており、その中には地味な土の塊から鮮やかな釉薬で彩られた皿やおしゃれなティーポットなども並んでいた。

「陶芸作品」というと真っ先に頭に思い浮かぶのは、普段私たちが使っているような茶碗や皿、マグカップなどの日常品に使われる焼き物である。しかし村井さんは焼き物を作る時、どのようにも成形できる柔らかい粘土で何を作るべきなのか悩み、試行錯誤を繰り返したという。その結果「いっそのこと自分で形を作らなくてもいいんじゃないか」という考えに至り、大学 3 年生の時に《融》を制作した。

土の色の鮮やかさが印象的な《融》は、強烈な赤色や白色、くすむ灰色と焦げた朱色の岩の塊が所々で露出する。様々な土が主張し合いながら大きな塊として一つに固まり、表面に走る大小のひび割れがまるで本物の火山岩のようだ。もし岩山に設置しても人工物としての違和感はないかもしれない。今となって思い返すと、この作品が一番表現したかったことに近いかもしれないと村井さんは語る。

村井隆宏《融》2009 年、粘土・型成形、30 × 30 × 35（縦×横×高さ cm）、作家所蔵。大学 3 年生で制作。筑波大学芸術専門学群構成専攻構成特別演習作品展に出品した。

その後も村井さんの試行錯誤は続くが、大学 4 年生の卒業制作では《重》を制作した。この作品は《融》のような土の塊が群集となって床に広がっているために、力強い存在感で圧倒させられる。表面を見ると土の色の鮮やかさは落ち着いたが、明暗に幅のある黄土色や白色、灰色のコントラストが美しい。色が異なる土が形を変えてまだらに積み上がった様子は、地殻変動によって捻じ曲げられた地層の内部を見るために掘り出された土柱のようであり、土や泥の力の流れを見ることができる。最も高く積みあがったものは 90cmほどの高さがあるようだが、どっしりとした重量感によって存在感を強めるために内部はくり抜きをしていない。そのため、《重》の全量は約 400kg もあり、卒業制作展の展示の時はとても苦労したらしい。

いかにしてこのダイナミックな作品を制作したのか聞いてみると、作り方は意外にも難しくなかった。石膏で作った直方体の型の中に様々な色の土を重ねていき、焼き上げた後に石膏の型を割って取り出す。石膏の型を割る時に作品の土も割れないように注意すれば、もしかすると誰でも作れてしまうかもしれない。生の土をそのまま作品に使うことが多い村井さんの作品は、確かに絵画や彫刻のように作者自身の手が作品の細部まで入ることはない。しかし、それ故に焼き物のみにしか出せない「土」という素材の面白さを見ることができるのではないだろうか。

村井隆宏《重》2010 年、粘土・型成形、270 × 180 × 90（縦×横×高さ cm）、作家所蔵。
大学 4 年生で制作。卒業制作作品。

魅力の原点

筑波大学芸術専門学群では、自身の専攻領域に限らず様々な美術分野を 1、2 年生の時に幅広く学ぶことが出来るのが特色である。村井さんは自身の所属していた構成専攻でクラフト以外にヴィジュアルデザインや現代アートを経験するだけでなく、美術専攻の内容である塑像などの造形技法も学んだうえでクラフトの表現を選択した。「現代アートはまず外に向かって発信したい問題を社会から見つけることが制作の出発点やけど、自分や素材と向き合って自分の表現を探究していくクラフトの表現の方が自分の性に合ってると思って。特に粘土は身近な存在で触ってみたいと思ったし、粘土を積み重ねていく過程が面白いと感じて陶芸に入ったかな」

村井隆宏《層》2013 年、土、寒冷紗・剥ぎ取り　20 × 45（縦×横 cm）が二つ、作家所蔵。
博士前期課程 1 年生で制作。東京の画廊を借りて行われたクラフト領域の展覧会「材」に出品。

素材が持つ魅力。粘土というどこでも手に入るような身近な素材で新しい価値を見つけたい。そのような考えの中、2013 年 10 月に東京の画廊を借りて行われたクラフト領域の展覧会「材」で、これまでのように床に設置する作品ではなく壁掛け作品の《層》を発表した。博士前期課程 1 年の作品である。地層標本のようなこの作品は、普段は見えない地面の裏側を捉えることをコンセプトにした作品だ。細かな砂の粒子や大きな石が生み出す隆起は人の手によって生み出された作品だということを一瞬忘れてしまう。地層が何千年という長い時間をかけて形成されたということを私は思い出し、その力強さに思わず心を揺さぶられた。

この作品も制作過程は複雑ではない。布に生の土を直接糊付けしたものを二つ制作し、一方はそのまま、もう一方は焼成したものをそれぞれ額におさめて展示した。生の土は黄土色であるが、鮮やかな赤い土は生の土を焼成した変化の結果だ。しかし、作品を見ると土は限りなく自然のものであるにもかかわらず、人の手によって「貼り付けられる」「焼く」という行為が介される。つまり、この作品は完全に人の手による作品ではなく、土が作品を形づくる主役であり、制作者でもあるといえよう。

「焼き物というのは器を作るよりも前に『土を焼く』という行為が本質。土を焼く行為を目のあたりにさせたいと考えての作品だった」という言葉を印象的に語ってくれた村井さんにとって、土という自然素材に魅力を感じるきっかけは何だったのか。

「丘の上にある高校の帰り道に見える夕日がきれいで、定期的に写真を撮ってた。そういう景色を見て『自然ってスゲーな』って高校生ながらに思ってたな」と言って村井さんが私に見せてくれた風景写真は、確かにいずれも綺麗な色を帯びていた。「たとえば、沈む夕日を見てなんかきれいだなって思う気持ちが湧くように、自然には力があるんだと思う。その自然の力を作品に取り入れて、単純に『きれいだ』と感じる気持ちを焼き物で共有できたらいいなという思いがあった」

陶芸の造形表現におけるその幅の広さには驚きを隠せない。新しい土のカタチを模索し続けるその姿勢は、秋山陽や西田潤という陶芸作家にも影響を受けているという。彼らの作品を見ると、村井さんの作品から感じる力強さにも納得がいく。彼らの作品は、素材だけでも人だけでも作り得ない、自然の力と作家の意思の融合体から生まれているのである。

固定概念からの脱却

陶芸というと器を連想するように、焼き物は伝統工芸品でもある。しかし伝統の型に当てはまらない村井さんの制作態度は、専門に限らずに色々なことを試すことが出来る大学の環境と、高校時代の美術の授業が影響しているようだ。

高校では普通科のクラスに通っていた村井さんであったが、美術の授業では日本画や彫刻、銅版画などに限らず、食品サンプル作りやフラッシュアニメーション作りと手広く色々なことを制作した経験を持つ。また、地元の芸術大学と協力してアートワークショップも開催したこともあったようだ。高校 3 年間で培った様々な制作経験が、村井さんの制作態度のルーツなのであろう。

美術、工芸、情報の教員免許を修得している村井さんは、来年から中学の教員となる。教員としてどのような授業をしたいのか伺ってみたところ、「ただ風景画を描かせるとかじゃなくて、世の中には変なものを作っている人がいるとか、固定概念を取っ払えるような面白いことを生徒たちに色々紹介してあげたい」と答えてくれた。

こうしてインタビューを進めていくうちに気付いたのは、村井さんの好奇心は限界を知らないということだ。土の新しい価値観を探究し続ける好奇心が作品の魅力を形作っているのかもしれない。そして村井さんは今日も土を焼くのだろう。まだ見ぬ土の造形を探して。